

イェレヴァン -- 孤立した国、アルメニアの首都 (フォト・エッセイ)

著者	Eric Rechsteiner
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	146
ページ	36-39
発行年	2007-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005136

■ フォト・エッセイ ■

イエレヴァン

—— 孤立した国、アルメニアの首都 ——

写真・文

エリック・レヒシュタイナー

Eric Rechsteiner



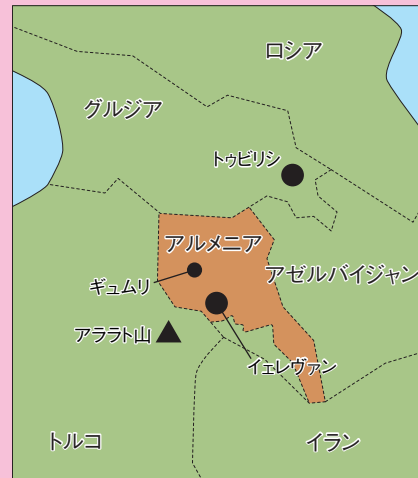
眼下に街、遠くにアララト山を望む丘の展望台でのカップル

黒海とカスピ海の間位置するトランスコーカサス地方の小国アルメニア共和国。イエレヴァンはその首都である。国土面積二万九八〇〇平方キロのアルメニアは、往々にして対立関係にある周辺諸国の交差点にあつて、北はグルジア、東はアゼルバイジャン、南はイラン、そして西方はトルコと接しているが、現在アルメニアへの出入りはグルジアかイランとの国境に限られている。

アルメニア文化はこれまで三〇〇〇年近くにわたつて盛衰を見ながらも花開いてきた。最大時には現在のトルコ東部及びイラク北部地方、イラン、シリア、グルジア、アゼルバイジャン各国の一部にまたがる三〇万平方キロの広大な国土を有したが、紀元三〇一年来のキリスト教国家であるこの国の歴史は、戦争と諸帝国の圧政とで埋め尽くされている。一九世紀初頭ロシア・ペルシア間の争いののち、国はオスマン、ロシア各帝国による分割統治下にあつたが、同世紀末にはアルメニア人を対象とした民族的迫害がくり返し起つた。さらに、一九一五年の「統一と進歩委員会」（いわゆる「青年トルコ党」）政権下のオスマン軍による大虐殺に至つた。アルメニア側によると犠牲者は一〇〇万から一五〇万人とされる（トルコ政府はこの迫害が民族抹殺を目的とした組織的なものではなかったと主張し、犠牲者数についても異議を唱えている）。現在の独立国家としてのアルメニア



イェレヴァンの南、ノラヴァンク修道院（イェレヴァンから122km行った所）



市場にて、ナルディ（さいころを振って駒を動かす、すごろくに似た遊び）を楽しむ商人達



アララト山とカール・ヴィラバ修道院（イェレヴァンから30km行った所）

が存在するのはソヴェイエト連邦崩壊の渦中の一九九一年以来のことである。

虐殺や紛争を逃れたアルメニア人達の回帰の地である首都イェレヴァンは、厳かにそびえるアララト山の広い裾野にある。創世記の中で、ノアの箱舟が大水の末に漂着した岸とはこの山で、アルメニアの人々にとっては聖地と言えるだろう。とはいえ人々の崇めて止まないこの山は標高五一六五メートルの高さから街を冷やかに見下ろすのみで、彼らがその万年雪を踏み締めることはない。アララト山は一九二〇年二月の条約以来、トルコに属しているからだ。

街の歴史は国自身と同様、再生の歴史と言える。紀元前八世紀創設のイェレヴァンは、インドとコーカサス地方の間を行き来する商人の交易地点として発展し、ペルシア人、ローマ人、アラブ人、モンゴル人、トルコ人、ロシア人とその支配者を変えてきた。一六から一七世紀にかけてのオスマン帝国とサファヴィー朝ペルシア間の戦争期には、双方の権力間にあつて帰属が変わった。この運命の揺さぶりに追い討ちをかけるかのように一六七九年六月、大地震が国を襲い、街は根元から破壊された。一九世紀後半以降、それまでティフリス（現グルジア首都トウビリシの旧名）やアレクサンドロポリ（現ギュムリ）などの街とさして変わらない規模だったイェレヴァンは一都市として、まもなく首都として変化を遂げていく。



旧中央駅前の記念碑



果物や野菜を扱う市場にて



街の中心の地下鉄の入り口

一九一八年五月、アルメニア独立共和国が初めて成立し首都と制定されるが、その後ソ連邦に包括されたアルメニア・ソヴィエト社会主義共和国首都として存続、ようやく一九九一年、イエレヴァンは再度独立を果たしたアルメニア共和国の首都として新たな道を歩み始めた。

しかし独立後何年かは苦しい状態が続く。冬期、気温が零下二〇度まで下がることも珍しくないイエレヴァンで、戦争や経済混乱の中、人々はガスも電気も通らない暖房無しの生活を余儀なくされた。

今日このいたって無機質な印象の街を歩いていてまず驚くのは、なお色濃く残るソヴィエト連邦時代の強い影響である。重々しく立ち上がるバラ色の石造りの建築の中を、時代はずれの路面電車や車ががたがたと大揺れしながら走っており、連邦崩壊以来放置された巨大な工場、旧式の地下鉄、そこに立つ記念碑、公園なども大いなるソヴィエト伝統様式を踏まえ、ロシア語も頻繁に使われている。

住民約一〇〇万人のイエレヴァンと、独立から一五年経った今でも成り行き任せに放置されているかのような国の他の地域との隔たりは著しい。国の富が一極集中するその首都はここ数年、街全体が埃にまみれた巨大で忙しない工事現場の様を呈している。歴史ある界隈がそっくり取り壊され、その跡に国外在住の新世代の成功者向けの現代建築が現れ始めたのだ。



下町にて、若い女性が洗濯物を広げていた



結婚式の日に出会った家族の男性達



イエレヴァン「リパブリック広場」で行われたコンサートにて

ソ連崩壊の瓦礫の中で、アルメニアの経済はすぐにマフィアのコントロール下に置かれ、それによって瞬く間に財を得た権力者達が国の主たる経済活動を仕切るようになったが、街の再生復興において重要な鍵を握るもう一つの勢力はディアスポラである。八五〇万人のアルメニア人のうち国内在住は三五〇万人を下回り、移住先で共同体が形成された国は世界中で五〇を上回る。国内の不安定な情勢に疲れ果て、トランスコーカサス地方の激烈な地政に絶望し、この数十年だけでも一〇〇万人近くが国を去った。彼らディアスポラにとっては伝説となった祖国とその首都に対する思いは強く、そこへの投資は惜しまない。

混沌とした国の経済体制のもとで、国民の半数以上が貧困ライン以下の収入で暮らし、その多くは国外在住の家族からの援助が生活を支えている。夏のイエレヴァンは休暇を過ごす家族達の再会の場となるが、少しも好転しない国情に向き合いながら生き残りをかけての暮らしを続けるイエレヴァン住民たちと、成功を収め理想化された故郷の大地を再訪する国際的で裕福なディアスポラという両極端が相対しているのは、複雑な思いのする情景である。

(エリック・レヒシュタイナー／写真家)